



＜梅雨の傘たためば水の抜け落つる＞ 長谷川權

＜梅雨空に祇園囃子が吸い込まれ＞ 哲風

ことしの梅雨入りは大幅に遅れ、6月末頃ようやく梅雨前線が西日本付近まで北上し、京都でも梅雨らしい雨模様の天気が続くようになりました。先週から九州や四国を中心に大雨が続いていますが、京都あたりは、曇天で気温は低めでわりと過ごしやすいですね。これは、添付の7月8日の天気図(図1)のように、梅雨前線が日本の南岸に位置しており、近畿地方はオホーツク海に中心をもつ高気圧(北の寒気団)に覆われているからです。南からの湿った暖かい気団と北の比較的乾いて冷たい気団の境目にできるのが梅雨前線です。その前線上にせいぜい数100km程度の空間スケールながら活発な積乱雲群を伴った小さな低気圧が西から進んできて、西日本各地に時として1日以上降り続く集中豪雨をもたらす、大きな水害の原因となっています。(このような低気圧は、春や秋に日本列島に雨をもたらす数1000km程度の大きな空間スケールをもつ温帯低気圧と区別して、気象学用語では中規模(メソ)低気圧などとよばれています。)

日本列島の梅雨には、実はもうひとつの顔があります。天気図と同じ日のアメダスによる気温分布図(図2)をみてください。愛知県付近から西は、30℃以上(赤色)の気温を示しているのに対し、北海道から東北地方太平洋側、関東から静岡県付近では、20℃かそれ以下(黄色・白色)の低温となっています。天気図(図1)をよくみると、オホーツク海に中心をもつ高気圧(冷たい気団)から気圧の高い部分が、東北地方の太平洋側に沿って、細長く南に伸びているのがわかりますが、このヒトデの足のような気圧の高い部分こそ図2の低温地域と対応しています。オホーツク海高気圧からの冷たい空気が三陸沿岸に沿って関東平野、さらには静岡付近まで沿岸に沿って流れてきているのです。北海道東部から三陸沿岸では湿った空気と低温のため海霧が広がり、日照不足にもなっています。このような低温と霧が卓越する天候はヤマセ(山背)とよばれ、日本の梅雨期特有のもう一つの大きな天気現象となっています。

東北地方の脊梁山脈は平均で1500m程度の高さしかありませんが、この冷たい空気の厚さは地上からせいぜい1000m程度なので、この山脈に十分ブロックされます。山脈東側を北から南に流れる冷たい気流は、地球自転力(コリオリ力)によって流れが山脈側に押し付けられて、(沿岸ケルヴィン波という波を励起して)山脈に沿った強い北東流となり、強い時は関東から沿岸に沿って、東海地方あたりにまで及ぶことがあります。この気圧パターンが持続すると、東北・北海道から関東地域は冷夏となり、農作物に大きな影響を与えます。岩手の農学校教師をしていた宮沢賢治の有名な詩「雨ニモマケズ」にある、「サムサノ夏ハオロオロアルキ.....」は、まさにこのようなヤマセによる冷夏による作物への害を心配した時の賢治の気持ちを詩っています。1993年の夏はまさにそのような記録的な冷夏年で、日本が初めてタイなどからのコメの輸入を行った年でした。私はその時、茨城県つくば市に住んでいましたが、真夏の8月でも曇天が続き、気温が日中でも15~16℃しかなかったことをよく覚えています。ちなみに、図1の7月8日に気象庁は「北・東日本太平洋側の日照不足と低温に関する全般気象情報」を出し、この夏は東日本を中心に久々の冷夏傾向となると警告しています。

ところで、梅雨前線に伴う(西日本を中心とする)集中豪雨とヤマセに伴う(東日本を中心とする)冷夏は、「地球温暖化」でどうなるのでしょうか。日本の災害や農業を考えた時に大きな課題です。大気・海洋の温暖化により水蒸気量が増加していることから、集中豪雨は明らかに頻度も強度も増すことが多くの研究で指摘され、IPCC報告(IPCC,2013)などでも強調されています。冷夏については難しいところです。気温は全般的に上昇傾向なので、冷夏の頻度は減少するとも指摘されていますが、ヤマセは、むしろ増加するという研究(安成通信、2017)などもあります。現在の気候モデルではまだヤマセのような現象を精度高く予測するには、まだ問題が多く残されています。ちなみに、この6月の北半球気温は、観測史上で最も高い気温を記録しました。

「地球温暖化」は、季節の進行そのものにも影響しています。田植えから収穫まで、季節の進行に適合

して行われてきた水田稲作農業への影響などは、地域ごとの気候特性が今後どう変わっていくかも十分考慮して評価していかなければならないでしょう。日本列島はグローバルには小さな地域ですが、「地球温暖化」の影響は、複雑な地理・地形分布のため、国内でも地域ごとに多様に異なって現れることに留意せねばなりません。

＜やませ吹く北半球といふ運命＞ 稲畑廣太郎

＜やませ吹き夜通し荒き濤の音＞ 坂根宏子

参考文献：

安成通信 2017/06/05 芒種 ー田植え時に想うー

IPCC、2013：Climate Change 2013: The Physical Science Basis. Contribution of Working Group I to the Fifth Assessment Report of the Intergovernmental Panel on Climate Change [Stocker, T.F., et al. (eds.)]. Cambridge University Press, Cambridge, United Kingdom and New York, NY, USA, 1535 pp.

図1：2019年7月8日の日本付近の天気図

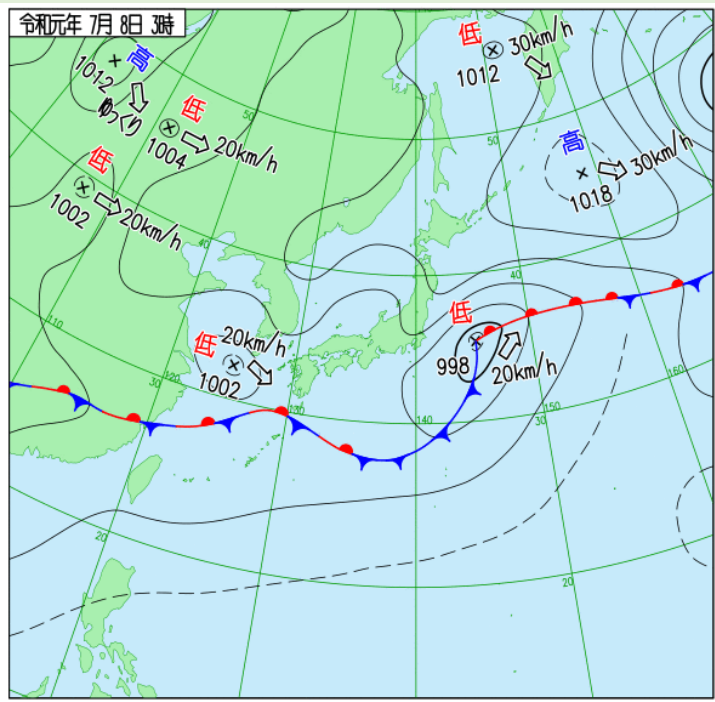


図2：2019年7月8日14時のアメダスシステムによる気温分布

